

滝本北谷

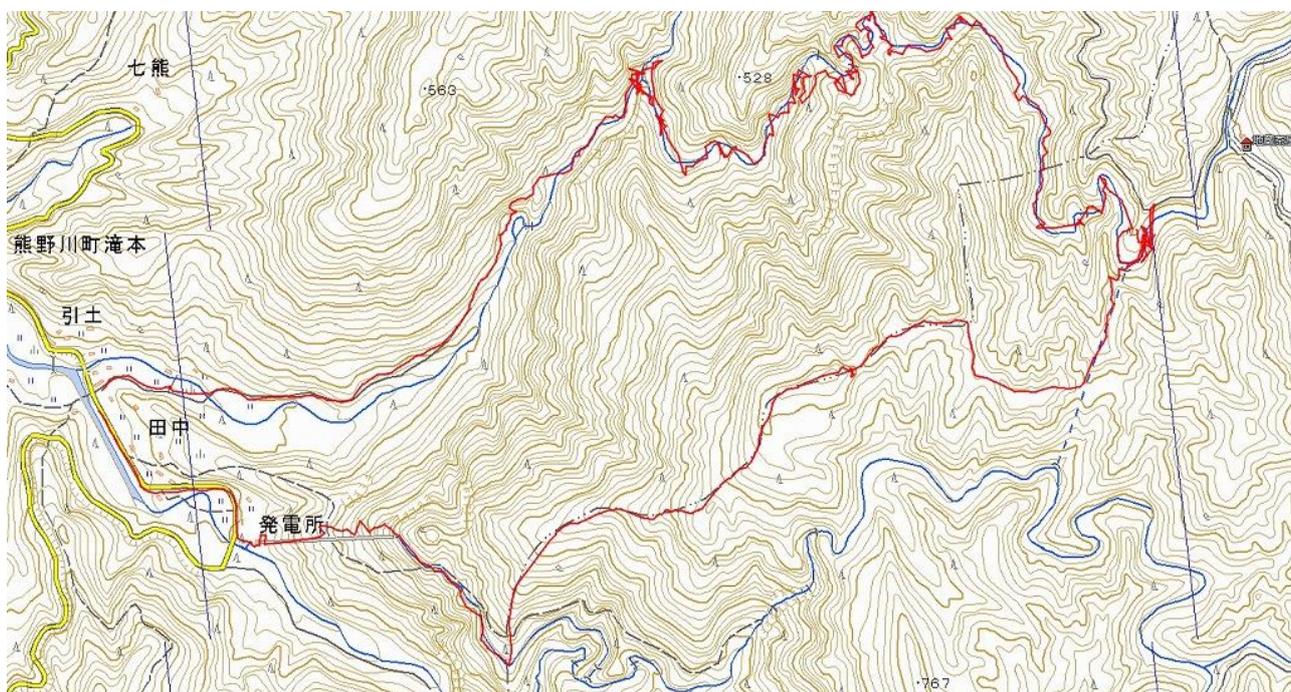
【日程】2016年7月31日（前夜出発）

【エリア】熊野川水系小口川

【形態】沢登り

【メンバー】U屋、M西、O田

【報告】O田



《ルート／タイム》

7月31日

道の駅おくとろ（5:15）～集落P（6:45）～亀壺の滝（11:05）～堰堤・遡行終了（13:00～13:30）
～関西電力・滝本発電所（15:30）～集落P（15:40）

《報告》

新潟映彩との2年に一度の交歓交流会の下見候補として滝本北谷が挙げられた。前夜のうちに道の駅おくとろまで車を走らせる。奈良市内から約3時間弱。天候は快晴、温泉を併設する立派な道の駅から、山に囲まれた天上を見上げると天の川と満天の星空だった。

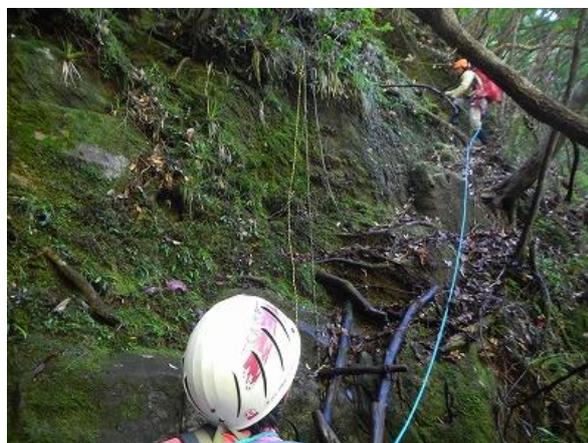
翌朝、滝本北谷の入渓地点までは途中、県道44号線に入るが、片側が山で片側が崖という峻道が10キロ弱つづき、朝から緊張を強いられる道だった。

滝本の集落は少ないながらも民家があり、廃校となった学び舎が川沿いに残っていた。車両を川沿いのスペースに駐車し、北谷を目指す。逆行図では北谷の林道終点にPとあるが、崩落箇所も著しく、終点まで車は進入できない。ここまで駐車地から約20分程度。

最初に見える筆藪の滝は左岸巻きをできるようだが、私たちは右岸から山道を巻くことにした。藪漕ぎを強いられるが50mほど超えると小さなコルにたどり着く。ここから本流に向かって下降し、入渓とした。



(左) 部屋滝



(右) 猿手滝の右横から巻いていく。

左手に猿手滝、右手に本流の部屋滝が見えてくる。部屋滝は立派な立壁のゴルジュとなっており越えることができない。そこで猿手滝の右側にトラロープと朽ちた梯子が出てくる。これを発見するのに幾分か時間を費やした。巻きの途中で山道は左右に分かれているが右の本流への進路をとること。誤って左へ入ると、越前谷へ降りてしまう。

溜湾殿滝ナメ滝だ。滝前には泳ぎたくなるようなプールが広がっている、透明度はそれほど高くない。左岸から巻いていく。

屏風滝は左岸から巻く。ほどなくすると、亀壺の滝が見えてくる。底無しにも見えるほど深淵のダークブルーの滝壺がすぐ目の前に広がっている。本日のハイライトの一つとっていいだろう。堂倉滝の奥七ツ釜を想起させられるような場所だ。ここは左岸に取り付きの踏み跡がある。丁寧にここもロープがぶら下がっている。



(左) 屏風滝



(右) 右手に亀壺の滝、大変深い釜だ。

ここを超えたあたりから、ナメがしばらく続く。ようやく今日のご褒美といったところだろうか。このあと、河原歩きが暫くつづき、このあとは巨岩の連続だ。南紀特有で岩にびっしりと苔むしているので、フリクションが効きやすい。

巨岩を越えて、しばらく河原が再びあるくと、最終は比丘尼滝が見えてくる。左岸に踏み跡が残っている。ここを越えると遡行打ち止めの堰堤まであと少しだ。

堰堤で昼食をとり、下山路へ。打ち止め地点から林道沿いに少し進路を戻っていくと、発電所の巡視路の看板が目につく。プラスチック製の黒い階段を順に上り詰めていくと尾根と尾根の間のコルにたどり着く。尾根こえて下っていくと滝本本谷へ向かうので、私たちは進路を右にとって尾根通しの道をたどっていく。赤い道標で「保郷会」とあるのでこれに従って歩く。また植生保護のネットが有るので、ここから外れなければ大丈夫だ。

尾根通しの途中のコルの部分で植生保護ネットが一部開放されているが、ここには立ち入らずに、そのままネット沿いに尾根を詰めていく。ここは多少テープなどが少ないため、迷いやすいかもしれない。



(左) 巡視路にぶち当たる。



(右) 導水管に沿って、ひたすら最後の階段を下る

尾根を下りきると導水路が見えてくる。あとは進路を右に取り、ひたすら発電所のある集落の横までたどっていただけだ。再びプラスチックの黒い階段が丁寧に整備されている。下山時間は約2時間。

帰路は、往路と逆方向に県道45号を走るが、道の駅まで2時間以上かかる。44号よりはいくぶんかましではあったが、やはり険路であった。この沢は道路面のアプローチが難点と言えるだろう。沢自体は滝あり、滑ありでモミジが映える紅葉時期にはさらに見応えがあるかもしれない。